

氏名	但島浩 た じま ひろし
学位の種類	医学博士
学位記番号	医博第12号
学位授与の日付	昭和34年3月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
研究科・専攻	医学研究科内科系専攻
学位論文題目	溶血性貧血に関する臨床的研究
	(主査)
論文調査委員	教授 三宅 儀 教授 前川孫二郎 教授 脇坂行一

論文内容の要旨

溶血性貧血に関する知見は最近著しく進展したが、本疾患の成因についてなお不明の点が少くない。

著者は各種の貧血を伴う疾患について Cr⁵¹ 標識赤血球を用いてその寿命を測定し溶血の有無を知るとともに、また溶血の原因を追究するため Coombs 試験その他の免疫血液学的検査を行なって、先天性溶血性貧血、種々の原因に基く後天性溶血性貧血のほかに不完全抗体による自己免疫性溶血性貧血の多数の症例を認め、さらに溶血の部位を決定するために Cr⁵¹ 標識赤血球の各臓器における摂取率を測定して赤血球破壊部位を推定した。これらの成績に基づいて摘脾の適応の有無ならびに摘脾その他の治療について検討した。

第1編 後天性自己免疫性溶血性貧血

各種白血病、悪性腫瘍、肝脾腫、再生不良性貧血、紅斑性狼瘡、薬物アレルギー、肝炎および黄疸、紫斑病、原因不明の溶血性貧血、先天性溶血性貧血、その他を含め計308例の貧血を伴う疾患のうち18例にCoombs 試験陽性を示し、後天性自己免疫性溶血性貧血に属するものを認め、これらの症例について種々の検討を行ない次の結果を得た。

1) その発生原因より見れば7例は特発性であり、10例は症候性、他の1例は発作性寒冷色素尿症であった。症候性のものは Hodgkin 氏病によるもの、薬物アレルギーによるもの各3例、骨髓腫、淋毒性白血病、単球性白血病、紅斑性狼瘡によるもの各1例であった。2) Coombs 試験値の増減と貧血の増悪軽快とが明かに平行関係を示したものが18例中12例に認められた。3) Coombs 試験陽性時には赤血球寿命は大多数において著明な短縮を示した。4) その他の主要所見として、貧血、網赤血球増多、赤血球食塩水抵抗の減弱、黄疸指数の上昇、尿中ウロビリノーゲン陽性、血清のγグロブリン増加を過半数に認めた。また白血球減少、栓球減少、骨髓の赤血球系/白血球系の増加、あるいは脾腫を約1/3の症例に認めた。5) ACTH および合成糖質コルチコイド剤による治療は15例中9例に有効であった。6) 18例中 Hodgkin 氏病3例、白血病2例、骨髓腫、紅斑性狼瘡各1例計7例は死亡した。

第2編 溶血性貧血における赤血球寿命と臓器内 Cr⁵¹ 摂取率

正常例15例および後天性自己免疫溶血性貧血をはじめ先天性溶血性貧血、再生不良性貧血およびその他の貧血患者36例合計51例について Cr⁵¹ 標識赤血球を用いて赤血球寿命を測定し、かつそのうち正常例7例、諸疾患例19例計26例について臓器内 Cr⁵¹ 摂取率を測定し次のごとき結果を得た。

1) 正常例の赤血球寿命(半減日)は24.0~37.6日であった。2) 先天性溶血性貧血において球形性のものは全例赤血球寿命短かく脾における Cr⁵¹ 摂取率高く、したがって脾における溶血の亢進を示した。しかし非球形性のものは赤血球寿命は短縮を示したが、脾における溶血の亢進は認め得なかった。3) 自己免疫性溶血性貧血においては Coombs 試験陽性時に赤血球寿命の著しい短縮を認めたが、脾における Cr⁵¹ 摂取率は高値を示すものと正常なるものとを認めた。4) 脾性溶血性貧血においては赤血球寿命短かくかつ臓器の Cr⁵¹ 摂取率から脾がその溶血の主役を演ずることを推定するとともに摘脾によりこれを確認した。5) 再生不良性貧血においても赤血球寿命短縮せるもの多数あり、かつその一部に脾の Cr⁵¹ 摂取率の高いものを認めた。6) 白血病でも半数に赤血球寿命短縮せるものがあつたが脾における溶血は認められなかった。7) 各種溶血性貧血の赤血球寿命と赤血球数の間には正の相関を、赤血球寿命と骨髓の赤血球系/白血球系の間には負の相関を認めた。8) 各種原因による溶血性貧血の溶血に脾、肝が関与する程度により5型すなわち I) 脾および肝の Cr⁵¹ 摂取率正常なもの。II) 脾の Cr⁵¹ 摂取率は初期のみ高く以後正常なもの。III) 脾の Cr⁵¹ 摂取率のみ高いもの。IV) 脾、肝ともに Cr⁵¹ 摂取率高いもの。V) 肝の Cr⁵¹ 摂取率のみ高いもの。に分類し種々の考察を加え摘脾のIII) は絶対的適応、IV) は相対的適応と推断した。

論文審査の結果の要旨

但馬は先天性溶血性貧血、種々の原因に基づく後天性溶血性貧血のほかに不完全抗体による自己免疫性溶血性貧血に属する多数の症例を認めて、従来不明な点の多かつた本症の成因、病像および所見について詳細な検討を行ない、かつその一部については有効な治療の経験を記述した。

また、放射性クローム Cr⁵¹ 標識赤血球を用いて各種溶血性貧血患者の赤血球寿命、臓器内における Cr⁵¹ 摂取率を測定して、特に溶血性貧血の溶血に脾および肝が関与する程度によって病型を分類し、同じく赤血球寿命の短縮があるも脾における Cr⁵¹ 摂取率の高くないもののあることを指摘し、諸型のうち特に脾の Cr⁵¹ 摂取率のみ高いものが摘脾の絶対的適応症であり、脾肝の Cr⁵¹ 摂取率のともに高いものが相対的摘脾適応症であることを推断した。

以上、本研究は溶血性貧血の成因、病像に関して重要な知見を加え、また、本症の治療にも貢献するところが少なくない。

このように、本研究は学術的にも予防治療上にも貢献するところが少なくない。したがって、本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。

〔主論文公表誌〕

日本血液学会雑誌 第23巻 (昭.35) 第2号

〔参考論文〕

1. 興味ある経過をとった再生不良性貧血症の1例
(守屋邦男ほか11名と共著)
公表誌 総合臨床 第7巻 (昭.33) 第3号
2. プレドニソロンによる諸種血液疾患の治療成績
(野手信哉ほか14名と共著)
公表誌 最新医学 第13巻 (昭.33) 第8号
3. 後天性自己免疫性溶血性貧血を伴える薬物アレルギーの2症例
(深瀬政市ほか12名と共著)
公表誌 日本血液学会誌 第23巻 (昭.35) 第1号
4. 慢性リンパ性白血病の1例について
(中嶋健一ほか2名と共著)
公表誌 医療 第14巻 (昭.35) 国立病院療養所総合医学会特集号